
*** S c h o o l L i f e ***

柚姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

* S c h o o l L i f e *

【Nコード】

N 9 4 2 3 B

【作者名】

柚姫

【あらすじ】

新蘭・平和・快青の、学校を舞台にしたラブストーリー。片想いだったり、両想いだったり……。一話完結の短編集です。

見つめる先（前書き）

初めての投稿です。

駄文ですが、よろしく願います。

見つめる先

あーかったりー・・・

5時間目というと、満腹感や心地よい暖かさで睡魔が襲う時間。かつたるさはMAX。

おまけに先生の声が、眠りを誘う呪文のように聞こえる。

この授業中、時間をつぶすには昼寝か・・・
それとも・・・

・・・蘭はどうしているだろう。

斜め前の席に座る、蘭の方へ目を向ける。
スラスラとシャーペン走らせている。

アイツは昔から授業中は真面目で、オレとは正反対。

ペンを止めると、サラサラとした黒い長い髪を耳にかける。
その姿に目を奪われる。

息をするのも忘れてしまうくらいに。

高校生だとは思えないような、艶っぽいその仕草。

チラッと見るはずだった。

だが、目を逸らせずにいる。

女らしい蘭の姿に、つい見蕩れてしまう。

その時、

蘭と目が合った。
思わず目を反らす。

気付かれた・・・？
ずっと見ていた事・・・。

もう一度目線を戻すと、蘭は何もなかったように、ノートを取っている。

危ねー。
アイツが鈍くて助かったぜ・・・

授業中でもなければ、こんなに蘭を見る事は出来ない。
蘭を見ている事に誰かが気付けば、クラスのからかいを受ける事は間違いない。
それに、本当に蘭に気付かれたら・・・

こんなかったるい授業に感謝しつつ、もう一度、蘭の元へ目線を送った。

見つめる先（後書き）

初めまして、柚姫です♪

こんな駄文を読んでくれた方、ありがとうございます。

他の作者の小説を読むと、頑張んなきゃ！と思わされます。

これから良い小説を書けるよう努力するので、次回もよろしく願
いします

寝顔

「この問題解いてくれる人！」

「誰もいないのか？じゃー鈴木！」

「えー私！？」

新一はいつも通り居眠り。

スースーという、規則正しい寝息が聞こえてくる。

よく見つからないよね、なんて思いながら、新一の顔を覗いてみる。

いつも一緒に居て、気づかなかつたけれど。
整った顔立ち。

ドキツとして、目を反らす。

何でドキツとしてるのよ・・・

昔から見慣れた顔じゃない！

ドキツとしてバカみたいと、目線を元に戻す。

スースーと、規則正しい寝息を立てている。

まるで小さい子供みたい。

そんな新一が可愛く見える。

キンコンカーンコン

授業終了のチャイムの音にハツとして、目線を前に向ける。

幼い頃から見慣れていたはずの新一の顔に、何故か見蕩れていて。
時間が止まった気がした、なんて言えば大袈裟だけれども、そんな感じがした。

「蘭。」

「あ、園子。」

「あんた授業中、ずっと旦那の事見てたでしょ？」

「しっ新一の事なんて見てないわよ／＼／」

「おやゝ？私、新一なんて一言も言っていないけれど？」

「だから・・・それは・・・／＼／」

図星を当てられ、顔が一気に真っ赤になっていく。

園子は面白いものを見ているかのように、ニヤニヤしながら見てくる。

赤く染まった顔を隠すように、早歩きをして、

「次は移動教室だから、早く行こう!」

言いながら、園子の腕をグイと引っ張った。

「ちよつと蘭。」

「な、何?」

「これ。」

と、園子が指差す方に目を移すと、未だに寝ている新一。

「だから／＼! 新一がどうしたのよ?」

「いいの? 新一君。まだ寝てるけど。」

まだ寝ていたんだ・・・。

園子とあれだけ騒いでいたのに、全然気付かないなんて・・・。

そう言う私も、新一が寝ていた事に気付かなかったただけ。

まあ、起きていたらちよつと困るけど。

そんな新一が、ますます子供みたいに見えてきて、愛おしく思えた。

でも、それを素直に認めたくなくて、あきれ気味に、

「早く起きないと、授業に遅れるわよ？」

新一はムクツと起き上がると、マヌケな声をだして、寝ぼけて
いるよう。

夢の中と、現実とを彷徨っている新一に、

「おはよう。」

寝顔（後書き）

こんにちは、柚姫です♪

『寝顔』は前回の『見つめる先』の蘭verみたいな感じです。前回よりも長く書いて良かったです⁺。

2回連続で新蘭だったので、次は平和か快青です。

次回もよろしく願います!!!!

ノートの落書き

「やつべー、宿題忘れた。青子写さして？」

「また忘れたの？」

「そーだよ」

「いつも青子のノート写してるじゃない。たまには自分でやりなさいよね。快斗は頭良いんだから、直ぐ解けるでしょ？」

「あーのー。数学の授業は次なんだぞ？間に合う訳ねーだろ！？」

「快斗が忘れるのが悪いんでしょ？」

「お願い！青子」

両手を合わせて、もう一度、「お願い」と頼む。

「もー、しょうがないなー。次はちゃんとやってくるんだよ」

もー、と口を膨らませる姿が可愛い。

思わずニヤけてしまう。

「はい」

「サンキュ」

しょうがないなーと言いながらも、ノートを写させてくれる。

青子のノートは、沢山の色を使いキレイにまとめられてあるので、オレは毎度世話になっている。

ただ、たまに漢字の間違いや、計算ミスがある。

ほら、また。

（ここ間違えてんじゃねーか。どうやってたらこうなんだよ……。ま、そこが青子らしくて良いんだけどさ。）

宿題を写し終え、紙をペラペラとめくっていく。
最後のページの隅に、小さな落書きがある。
何だろう、と見てみると、

相合い傘。

その中には、快斗・青子と書かれてある。

そう、オレと青子の名前。

一瞬、青子の友達が、勝手に書いたものだと思った。
クラスメートがオレと青子をからかう、なんて事、よくあるから。
しかし、これはどう見ても青子の字。
青子を書いたもの。

また、ニヤけてしまう。

青子をチラッと見て、もう一度。

たく・・・可愛い事しやがって・・・。

オレはそのページを破いて、それを筆箱にしまった。

ノートの落書き（後書き）

こんにちは、柚姫です♪

久しぶり、と言った方が良いのかな；；

ノートに相合傘。

かわいいと思いませんか？

青子ならやってくれるかなと思ってv

っていうか、実は書いてあるんでしょv

今回の投稿も遅くなってしまいましたが、よろしく願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9423b/>

* S c h o o l L i f e *

2010年10月11日16時03分発行